

れにくっついたのは、トルファンも同じように娘があそこへ行ってるわけで、蒙古族とは非常に親しき関係をもったわけです。そういう関係もあって、その自分たちに近い民族をジンギス汗は非常に大事にしているということから、やはり、西方のトルコ族はみなジンギス汗の世界帝国を作る上に貢献した。そうしたトルコ族の役割というものに一番最初に口火を作ったのは、オングート族であったんじゃないかと、いうことにもなるわけなんですね。

〈映像〉

江上先生
発掘現場
調査地点
調査報告書
と資料

8. 古代オリエントへ ～古代からのメッセージを求めて～

(ナレーション) ▶オロンスムでのオングート部族の王府址およびローマ教会堂遺跡の発見の報せは戦前、北京の輔仁大学を通じていち早くヨーロッパに伝えられ、欧米の学界に「江上」の名前が知れ渡るところとなりました。

▶戦後間もなく、フランス政府は東西文化交渉史家として知られるルネ・グルッセを日本に派遣しました。その最大の目的はオロンスム調査の真偽を確かめることにありました。グルッセは日本に来て、遺跡の写真や発掘品などを熱心に見てから、彼が館長をしているパリのギメ博物館で講演してほしいと江上先生に申し入れました。

この講演が契機となって、昭和26年の国際東洋学会議でもオロンスムの報告をすることになりました。会議に出席した中近東の代表からは自国の遺跡調査の依頼が相次ぎ、そうした中で西アジアにおけるわが国最初の学術調査団である東京大学イラク・イラン遺跡調査団が昭和29年に発足します。

▶江上先生は昭和31年の第一次調査から団長をつとめ、学術的な資料および情報をできる限り豊富にわが国へもたらすことに力を注ぎました。

オロンスムでの発見は戦後になってから大きな実を結んだのです。

(江上先生トーク)

(先程あの、戦後いち早く、昭和31年からですか、先生は又、海外に出られて、イラク、イランで調査を始められたわけですが、その西アジア調査の経緯をちょっとご説明頂けますか)

そのオロンスム調査というものがヨーロッパにも聞こえて、そしてそのルネ・グルッセなんかもくるようになったものですから、戦後に初めて東洋学者